

退職にあたって

広 渡 純 子

私が岡田山の聖和キャンパスに初めて来たのは、1980年春、聖和創立百周年の年です。京都の大学で英文学を学び、大学職員としてしばらく働いた後、新たに幼児教育を学ぶために30歳で聖和大学大学院に入学するためでした。大学院修了後は、西宮市にある教会附属幼稚園に就職し、33歳の新米保育者として3歳児を相手に四苦八苦の毎日を送りました。そして1984年に聖和短期大学の助手となり、以来32年間、保育者養成に携わることになりました。30歳を過ぎて初めて知った「子どもの世界」の面白さ、不思議さ、豊かさ。この出会いはそれまでの私を大きく変えました。そして私にとって生涯の喜びとなりました。子どもたちは、私たち大人が見失ってしまった人間の原点をもう一度思い起こすきっかけを何度もくれました。たとえば子どもたちは、互いに異なる個性や意志のぶつかり合いをとおして、自分とは違う「他者」と出会い、思いが一致する喜びを味わったり、思いがすれ違って悲しんだり、思いがぶつかって怒ったり泣いたりしながら、次第に一緒に遊ぶ楽しさを学んでいきます。今、世界では、文化や宗教などの「違い」を理由に人間同士が憎しみ合い報復し合うという悲惨な負の連鎖が続き、たくさんの命が失われていますが、ぶつかり合いながら他者と共に生きることを学んでいく子どもたちの姿が教えてくれる人間本来の姿は、今、この時代がいちばん学ばなければならないことではないでしょうか。

今、退職にあたり、他のどこでもないこの「聖和」で保育に出会い、長年、保育者養成に携わることができたことの幸せを思います。保育者養成において長い歴史と伝統をもつ聖和が創立以来受け継いできた「キリスト教保育」は、いうまでもなくキリスト教の人間理解を土台とした保育であります。その第一は、私たちは神によって創造され、そのまま（無条件に）神に愛されている存在であること。つまり私たちは神の愛を根源とする存在であること。第二は、神によって自由な意志を与えられている存在であること。聖和の保育が子どもの自主性、自発性を重視し、自らが心を動かし、考え、行動するこ

とを大切にするのはここにあります。そして第三は、この神の愛と信頼に応答する存在であることです。神に愛されるだけでなく、自らも人を愛し、世界の平和をつくる者となることです。そしてこの3つは子どもだけでなく、大人にも届けられるメッセージです。

キリスト教保育は、女性や子どもの人権がまだ認められていなかった明治期日本において保育を創始し、その発展に大きく貢献しました。そして聖和はその重要な一翼を担ってきました。子どもたちが教育や保育を受けることが当たり前になった今日、キリスト教保育はその役割を終えたかのように見えますが、むしろ今の時代だからこそ担うべき重要な役割があります。日本では貧困や虐待、また世界では飢餓や戦争・紛争などが今もなお多くの子どもたちを苦しめています。「世界のすべての子どもたちの幸せに貢献する人材を育成する」。聖和短期大学に与えられたこの使命の実現をめざして、このキャンパスでこれまでたくさんの学生と共に学び、教職員のみならず共に働くことができましたことは何よりの恵みでした。感謝の思いでいっぱいです。聖和を離れてもこの使命を忘れずに歩んでいきたいと思っています。ありがとうございました。